View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

巻　頭　言

村　上　和　夫
立教大学 観光学部 学部長

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災の影響を大きく受けた昨年と異なり、本年 2012 年は観光学部ならびに観光学研究科において新しいカリキュラムが始まり、観光学科においては世界の観光の将来を論じながら観光学科における教育の将来を考える将来構想委員会が設置され議論が開始されました。観光研究所では、アセットマネジメント研究会とラグジュアリーブランドマネジメント研究会の二つの研究会が、年間を通じて開かれ、その成果は 2013 年度より全学共通カリキュラムで総合科目の講義として展開される予定です。さらに、本年度も多くの寄附講座をいただきましたが、経済団体連合会（経団連）からご寄附いただいた「経団連インターンシップ」は、参加企業が伝統的な観光産業から徐々に広がりを持つようになってきました。学部の国際連携も少しずつ拡大しており、インドネシア大学（Universitas Indonesia）との連携が成立しました。

観光研究の世界では、旅行業や宿泊産業などの伝統的な観光産業の経済効果を維持拡大することための経営研究、あるいは観光地の地域住民が伝統的な観光により町づくりに進める手法の研究、あるいはそれに伴う地域社会や文化の変容の研究、国際化と称する技術等の海外からの移転と普及方法の研究などのこれまでも視座が、現在も重要ではあるものの拡大しつつ現状にうまく対応できないものとなりつつあります。

観光学部、大学院観光学研究科、立教大学観光研究所が一体となって、観光の将来について考え、研究対象と研究方法を再構成する必要があると言える時期に来ているのかもしれません。立教大学における観光研究と教育はホテルの経営に関する教育と研究をその出発点としています。しかし、現在学部や研究科におけるその比重があまり大きくなってしまった中で、社会ではその価値への注目から逆にホテルブランドへの投資は高まっています。東京を中心に都市再開発の中でホテルは新しい役割を発揮しつつあります。このような乖離は、旅行業を核とする旅行産業の研究においても、権力構造の変容や文化変容に注目した地域研究においても生じていると言わなければならないでしょう。

さらに、グローバル化とは、外からの移転よりも内にあるものを外に調和させ、世界の発展に貢献する行為と言えるでしょう。立教の観光研究や教育は、各国の連携先大学を通じて、世界における観光の発展に貢献する必要があります。観光を経済効果の手段としてあるいは社会や文化を変容させる独立変数としてのみ理解するのではなく、より柔軟かつ創造的視野から社会あるいは世界におけるその役割を再検討する必要があると考えられます。

■